



生きものの元気米

お米を作る人も、食べる人も、生きものも、みんなが元気になる農業を

農家の多くは、自分の田んぼにどんな生きものがすんでいるのかを知りません。
お米を消費者に直売している農家は少なく、自分が作ったお米がどのように流通され、
誰が食べているのか、詳しくは知らない農家もたくさんいます。

一方、消費者の多くは、自分が食べているお米を誰がつくっているのか、
どのような田んぼでつくられたのかを知りません。
農家から直接お米を取り寄せている人でも、そのお米が作られている
田んぼにすんでいる生きものまでは知りません。

生きもの→田んぼ→農家→消費者、これらをつなぐことで、
生物多様性の保全と持続可能な農業、安全安心な食を実現したい。
そう考え、「生きものの元気米」をはじめました。

田んぼ一枚ずつ生きものを調べ、生きものから田んぼと農法を評価し、
田んぼ一枚ずつ袋詰めし、生きものと田んぼの情報とともに消費者にお届けする。
ほんとうは当たり前だけど難しい、そんな取り組みを進めています。

水と農と生きものを守り・活かす

NPO法人河北潟湖沼研究所

田んぼは 生きものの宝庫

日本の田んぼには6,000種を超える生きものがすんでいると言われています。

多くの田んぼは、湿地を埋めたり開墾してつくられてきました。

田んぼでは、耕されたり、水が入ったり抜かれたりすることで、

特定の強い生きものが独占することなく、

色々な生きものが生き残ることができます。

田んぼと田んぼの境界にある土が盛られた畦には、

陸と水の両方を必要とする生きものもすむことができます。

自然の湿地は開発により失われてきましたが、

湿地にすんでいた生きものたちの多くが 田んぼで命をつないでいます。





田んぼが減っている

日本の田んぼは年々減少しており、1956年には全国で約332万haありましたが、2021年には約236.6万haと約30%も失われました。

山手の田んぼに比べると作りやすい河北潟のまわりの田んぼでも、住宅地や大型店舗、道路や駐車場、グラウンドなどがつくられ、つぎつぎに田んぼが失われています。

農薬による生態系への影響

ネオニコチノイド系農薬などの浸透性殺虫剤、畦につかわれる除草剤が毎年田んぼの広い範囲で使われています。浸透性殺虫剤は、水に溶けることで、根などから植物に取り込まれ、農薬を取り込んだ植物の葉を食べるだけで虫が死んでしまいます。最近はイネの苗箱に入れる人も増えているようです。イネを食べる小さな虫たちがいなくなれば、虫を食べるカエルやトンボ、それらを食べるヘビや野鳥など、多くの生きものに影響が及びます。

浸透性殺虫剤の散布

害虫を食べる益虫まで死にます。➡

人だったら、抗がん剤により、ガン細胞とともに、白血球が死んでしまうようなもの。



強力な畦の除草剤

田んぼの中に使われる除草剤にくらべ、畦草用の除草剤は強力な成分が含まれます。除草剤がまかれた畦は、植物が枯れてなくなり、土がぼろぼろになります。生きものが生息しにくい環境になります。

← 除草剤で畦の草を枯らす

クモやバッタ、カエルの姿もなくなります。

人だったら、骨髄が破壊され、白血球と赤血球が正常につくられなくなるようなもの。

ネオニコチノイド農薬など浸透性殺虫剤とは？



ネオニコチノイド系農薬の性質は、正常な神経伝達を乱す「神経毒性」、水に溶解植物の組織の隅々にまで浸透する「浸透性」、長期間にわたり毒性の成分が土壌や水の中に蓄積する「残留性」があります。昆虫に対する強い神経毒性は、害虫以外にも多くの昆虫に影響を及ぼします。また人間への影響も指摘されています。水に溶けることで、水を介して周辺の草木や地下水に入り込み、殺虫剤を使用していない地域へも広がる危険があります。そして、一度使われると

土壌や水の中に長く留まり蓄積していく性質から、生態系に大きな悪影響をもたらす可能性があります。一般にネオニコチノイドと呼ばれる化合物には、アセタミプリド、イミダクロプリド、クロチアニジン、ジノテフラン、チアクロプリド、チアメトキサム、ニテンピラムなど多くの種類があります。またよく似た作用をもつフィプロニルがあります。2000年代から家庭で使われるゴキブリやシロアリ、ペットやガーデニング用殺虫剤にもふつうに含まれるようになりました。



2015年・エコプロ(環境展示会)

東京ビックサイトで開催されたエコプロに出展して「生きもの元気米」の活動をPRしました。農薬を使い続ける田んぼと、生態系の力を利用して農薬を必要最小限に抑える田んぼを、人間に例えて説明し、来場者のみなさまに疑問を投げかけました。



田んぼも健康診断を

薬は必要なときに必要なぶんだけ、できるだけ使わない。

それは田んぼでも同じことがいえます。

詳しい病状もわからずに、薬を使い続けていれば、免疫力も低下し、健康でいられません。田んぼには色々な働きをする生きものが数多く生息し、それらの状態を知ることが大事です。



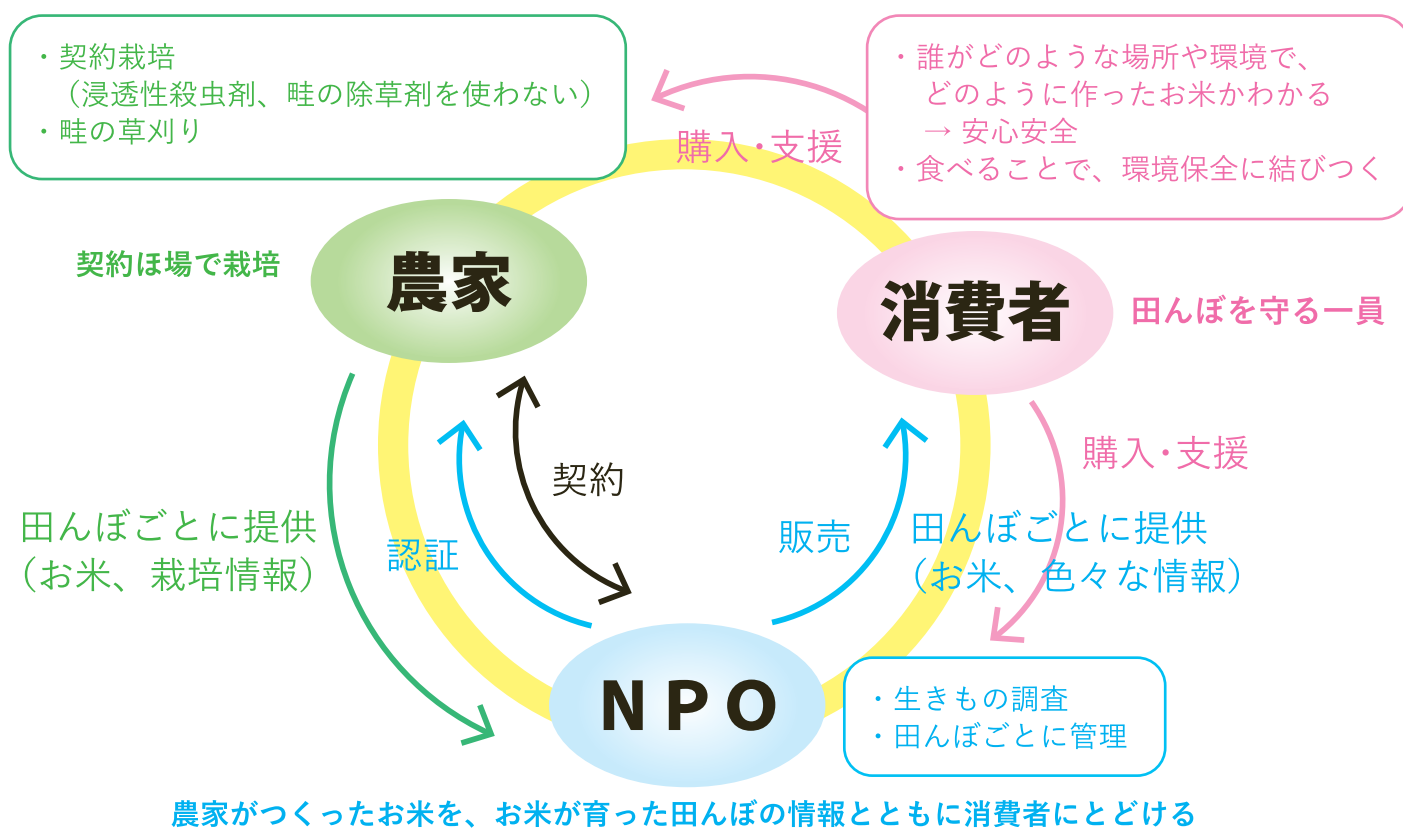
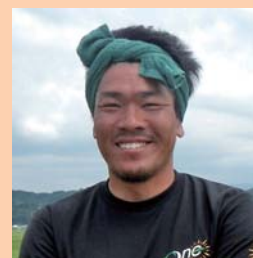
田んぼを守るために

2013年に発行した「河北潟レッドデータブック」をまとめるにあたって、「河北潟」とそのまわりの生きものを調べたところ、田んぼや湿地に生息する生きものが減少していることがわかりました。そこで、生態系への影響が大きいと考えられる農薬（浸透性殺虫剤と畦除草剤）を使わない農業をすすめられないかと地元農家さんに相談、みんなが元気になる仕組みとして「生きもの元気米」の取り組みをを提案し、農家さんとの協働により、2014年より「生きもの元気米」の生産・販売がはじまりました。

生きもの元気米は、①農薬の空中散布をしない+浸透性殺虫剤を使わない、②畦の除草剤を使わない、この2つを栽培の条件とし、当団体で田んぼの生きもの調査をして、田んぼごとに生きもの元気米として認証しています。



初年度の「生きもの元気米」生産農家（3名 + 農事組合法人1団体）





生きもの元気米認証マーク

KLi 123 - 21 - 000

田んぼコード 生産年 袋ごとの固有番号

「生きもの元気米」の米袋には、認証マークをつけ、生産年がわかるようにしています。また、1袋ごとにロット番号をつけています。

お米が育った田んぼの生きものの情報

「生きもの元気米」では、ほかの田んぼのお米が混ざらないように、田んぼ一枚ごとに管理しています。

米袋には、お米を作った人、田んぼの住所、田んぼの生きもの、肥料や農薬等の使用情報が掲載されています。そのため、田んぼが違くと、米袋の内容も異なります。

田んぼの様子や生きものの情報までわかることで、食べる人は安心が得られると同時に、田んぼから離れた場所においても田んぼの環境に興味をもっていただくことができます。継続的な田んぼのファン(応援者)ができることも期待できます。

生産農家は自分が作ったお米として消費者に提供されますので、米づくりにもこだわりが生まれます。



「生きもの元気米」は、河北潟湖沼研究所の登録商標です。



ネオニコチノイド系農薬などの浸透性殺虫剤、畦の除草剤の使用を止め、生産農家や田んぼの個性を大切にしたい米づくりによって、作る人、食べる人、田んぼの生きもの、みんなが元気になることを目指しているのが「生きもの元気米」です。

← 2023年産の生きもの元気米生産場所

生きものの元気米の生産農家と田んぼの情報

生産農家さんには、「生きものの元気米」に参加いただいた最初のときに、米づくりへの思いをメッセージで残していただいています。2023年産現在の「生きものの元気米」の生産農家さんをご紹介します。



中村 明さん

田んぼ住所：
石川県金沢市八田町中89

田んぼ面積：
約1,734平方メートル

かつての河北潟地域

今から約40年ほど前、河北潟に通ずる河川には入江があり、田んぼ脇の水路から舟を使って米を運搬していました。そのころは家に舟がありましたので、舟で潟を移動し、ハッタミミズを使って、ウナギやフナなどを釣っていました。

八田町のハッタミミズ

ご存じの方は少ないかもしれませんが、八田町にはハッタミミズという今では珍しいミミズが生息しています。大きいもので約80cmほどの巨大なミミズで、八田町はこのハッタミミズが初めて発見された場所です。昔は町内の田んぼのどこを掘っても見つかりました。今でもハッタミミズは八田町に生息していますが、昔を思うと最近は本当に少なくなりました。



田んぼコード:NHa89 (2014年～)

生きものがたくさんいる環境を広げたい

これまでも自然への環境負荷のことを考えて、農薬の使用量を極力抑えたり、畦の草は除草剤を使用せず定期的に草刈を行うよう努めた米栽培を行ってきました。「生きものの元気米」はその名のとおり、生きものがかつてのように本来あるべき環境を広げていこうとする取り組みです。多くの人が賛同し、地域全体にハッタミミズやカエル等が増え、かつての環境に少しでも戻って欲しいとの願いから参加しています。



農事組合法人One

田んぼ住所：
金沢市才田町戌278

田んぼ面積：
約4,064平方メートル

若いメンバーで農業と向き合う日々

私どもは平均40代のメンバーが主体となって、農業と向き合いながら、日々探求心を燃やす農事組合法人です。土づくりを第一に考え、持続可能な農業、地域の自然や景観を未来につなぐことができる農業の奥深さを、どなたでも感じてもらえる米づくりをモットーとしています。

米づくりはいい土づくりから

ほ場面積は稲作面積だけでも約36haありますが、どの田んぼでもまずは土を見て、いい土を作ることから始まります。お米は人が作るのではなく土が作ってくれる、そして我々はそのサポートをするだけです。

〈農事組合法人Oneさんは、現在2枚の田んぼで「生きものの元気米」をつくっています。〉



綿村 裕さん

田んぼ住所：
金沢市才田町東63番地

田んぼ面積：
約4,000平方メートル

金沢市才田町は米づくりの文化を持つ町

今から5年ほど前までは、2ha程度の田んぼでお米を作っていました。才田の辺りは昔から農業が営まれてきた地域で、一軒あたり大体2ha程度の田んぼを持っています。当時は収穫したお米の仕上がりを楽しみにしていましたが、会社経営の傍らの収穫作業を続けるのが年々難しくなり、現在では40aを残し、残りの田んぼは貸し出してお米を作ってもらっています。

才田地域の文化をなくさないために

現在は多くの方が、ほかの人に土地を貸して作ってもらっていますが、田んぼを維持するためには様々な費用がかかるため、土地を手放す人が多いのも現状です。このままでは才田の文化や景観が失われていく可能性がある中で、お米の価値を高め、健全な農業ができるよう将来につないでいきたいと思います。

人や生きものにやさしい農業で才田地域を活性化したい

そのような思いがある中で、1年前に私の田んぼの生きものを調べてもらう機会がありました。その結果、ほとんど生きものがいない事実を知り、正直ショックでした。私が思うこれからの農業は、人や生きものに優しい農業です。これを実現する米づくりを広げていき、環境へ配慮したブランド米をつくり、地域を活性化したい、との思いから「生きものの元気米」の取り組みへの参加を決めました。



田んぼコード:WSa63 (2014年～)

農事組合法人One

田んぼ住所：
金沢市才田町戌279-2

田んぼ面積：
約1,438平方メートル

見える形で安全・安心なお米を

「生きものの元気米」は、いい土づくりと、次世代の子供たちに残すべき生きものを守り育てることが出来る、新たなチャレンジだと強く思います。

生きものが食べられないお米を、人が食べているのはやはり自然ではあり

ません。これからは見えない安全・安心ではなく、安全なお米に見えるようにして、安心して食べてもらいたいと考えています。そのための第一歩として、私どもも「生きものの元気米」の取り組みに参加しています。



田んぼコード:OSa278 (2016年～)



田んぼコード:OSa2792 (2016年～)



自分が食べたいと思うものをつくる

2015年度から、生きもの元気米の栽培契約を交わしました。田んぼのほかに、河北潟干拓地で農薬を使わない果実や野菜も栽培しています。これらの野菜や果実を食べて育ったニワトリも園内で飼っています。

農薬は好きではありません。自分が食べたいと思うものを目指した結果、農薬を使わないことを基本に栽培する農作物が増えていきました。毎年、栽培方法を試しながら日々農業に向き合い、試行錯誤を重ねて、いい農作物を作りたいと考えています。

楽園果実 石橋農園 (園主:石橋 英朗さん)

生きもの元気米の取り組みは2014年に話を聞いたときから、農薬を使わない取り組みとして興味があり、私の作っている米も皆様に食べてもらいたいと思い参加しました。



田んぼコード:IKi789 (2016年～)

田んぼ住所:
金沢市岸川町に7、8、9

田んぼ面積:
約2,457平方メートル



田んぼコード:IKi25 (2021年～)

田んぼ住所:
金沢市岸川町は24,25,26

田んぼ面積:
約2,457平方メートル



田んぼコード:IKi4748 (2023年～)

田んぼ住所:
金沢市岸川町ろ47,48

田んぼ面積:
約1,638平方メートル



〈石橋農園さんは、すべて農薬不使用で生産されており、2023年産は3枚の田んぼで「生きもの元気米」をつくりました。〉



農事組合法人蓮だより

田んぼ住所：
金沢市才田町東58

田んぼ面積：
約4,687平方メートル

私共はこれまで、兼業農家として2haほどの面積で水稻栽培を行ってきました。平成19年より河北潟干拓地にて加賀れんこんの栽培を始めたことをきっかけに、自然との共存共栄を考えるようになり、農薬フリーの農業に取り組むようになりました。

取り組みを始めた農地では様々な生態系が見られるようになり、昔、地域の農地で見た風景を継続させていきたいという思いが、より一層強まってきました。

今回、環境に配慮した生きもの元気米の栽培に携われるということで、私どもの活動を通して、環境保全に少しでもお役に立てるよう汗を流して頑張らせて頂ければと思います。



田んぼコード:HSa58 (2018年～)



NPO法人河北潟湖沼研究所

田んぼ住所：
金沢市二日市町口96

田んぼ面積：
約821平方メートル

農薬不使用の可能性をさぐるために、当団体でも「生きもの元気米」をつくらうと、2017年より田んぼをお借りし、農薬不使用、有機肥料、稲架干しでの栽培を続けています。2023年は田んぼにドジョウがたくさんみられるようになり、生きものが増えているのを実感するとともに、美味しいお米が穫れることに喜びを感じています。農薬不使用でも、収量を落とさず栽培できるよう試行錯誤しています。



田んぼコード:KFu96 (2017年～)





藤木 正範さん

「すべての人に農業を(Farming for all)」

太陽と土をうやまい、人と農業を愛します。敬天愛人 敬土愛農。

持続可能な社会を築く(SDGs)には一番優先させなければならないのは「生きもの元気米」の土づくりです。そしておいしい米を毎年、だれもができるやさしい技術で楽しく作ることをめざします。私たちは4つの農家(米、スイカ、大豆、野菜農家の結婚しなかった長男三男坊)が中心になって、いしかわ自然学校の「親子で育てるスイカキャンプ」のプログラムを作っています。これから「親子で育てる生きもの元気米キャンプ」を行います。農家になりたいと言う子供たちを育てます。



田んぼコード:FMi189 (2021年～)

田んぼ住所:
河北郡内灘町宮坂ぬ189番地

田んぼ面積:(初年度は約991㎡)
約3,966平方メートル



田んぼコード:FMi187 (2022年～)

田んぼ住所:
河北郡内灘町宮坂ぬ187番地

田んぼ面積:
約991平方メートル



田んぼコード:FMi185 (2022年～)

田んぼ住所:
河北郡内灘町宮坂ぬ185番地

田んぼ面積:
約991平方メートル



〈耕作放棄地を再生し、農薬不使用・稲架干しで生産されています。〉



「生きもの元気米」の生産を検討いただける方は、事務局までご連絡ください。(連絡先は冊子裏面)
農薬不使用で栽培いただける生産農家さんを探しています。
家庭用につくられている田んぼを農薬不使用に切り替える(一部を納品いただく)などでも可能です。

「生きもの元気米」取り組みをはじめて10年経過

多くの皆様に支えられ、少しずつ取り組みが広がっています。

「生きもの元気米」のお米を食べる力が、活動を継続する大きな原動力となります。ぜひ、ごはんを食べて応援ください！

	2014年	2016年	2018年	2020年	2022年	2023年
田んぼの面積	10,834㎡	21,149㎡	26,748㎡	21,548㎡	27,598㎡	29,236㎡
枚数	4枚	7枚	9枚	8枚	11枚	12枚
生産農家数	4軒	5軒	6軒	6軒	7軒	7軒
生産量 (生きもの元気米として取り扱った量)	約1.6トン	約5.6トン	約6.5トン	約7.5トン	約7.2トン	収穫中

お客様からの感想

「とてもおいしかった。久しぶりにおいしい米を食べた。ありがとうございました。」(2015年)

「大変美味しく、友人達へもプレゼントしました。お歳暮と年賀で袋のデザインも変える気配りに感心しました。お米と水の割合は、同量よりも大スプーン2杯、水は少なめのほうが美味です。個人の好みにもよりますが、圧力釜で沸騰3分で消化して、16分蒸すと美味しいごはんが出来上がり！」(2015年)

「生きもの元気米の玄米、早速頂きました。これまでも玄米を食べていましたが、それほど美味しいと思っていなかったのが、生きもの元気米はとてももちりして好きになりました。」(2016年)

「生きもの元気米食べてみましたが、月並みな表現で申し訳ないけど「美味しい」です。表現が難しいですが、いつものよりモチモチしてる感じです。そして子供のいる家庭にも配ったのですが

「美味しい!」「色が白い!」の他に「子供がごはんをいつもの倍食べた!」という意見があり、刺激に慣れた大人より子供の方が味の違いがわかるのかもな～と思いました。」(2016年)

「元気米を毎日美味しく、嬉しくいただいております。味が美味しいのはもちろんですが、お米を研ぐときに、お名前どうり、お米自体をととても元気に感じます。そのことも嬉しいです。」(2019年)

「玄米を発酵玄米にいただいておりますが、今まではベチャベチャになりましたが、元気米はそうはならず一粒一粒が離れてでき上がるので美味しいという感想です。今まで玄米は健康のためという気持ちでボソボソでもがまんして食べてきましたが、元気米は味わえると思いました。」(2020年)

貴重なご感想をたくさんいただいております。HPにてご覧いただけます。→



美味しいお米をお届けするための日々の取り組み



分つき対応、低温精米機

低温精米でお米へのダメージを軽減。精米機は毎回きれいに掃除し、古い糠や、ほかの米が混ざらないようにしています。



水分量の計測

お米は、乾燥のさせ方や、保管方法によって状態が変わります。水分量や香りをチェックし、お米が変化していないか気をつけています。



梱包前に目で見て確認

異物や粳が混入しないよう、お米を確認しながら袋詰めしています。農家さんにも品質を一層高めていただこうお願いしています。

田んぼ一枚ごとの生きものの調査から考える

「生きもの元気米」では、田んぼ一枚ごとに生きものを調べています。
農家さんの協力をいただいて「生きもの元気米」をはじめる一年前から継続しているこの調査によって、田んぼごとに生息する生きものに違いがあることがわかりました。これまでに結果の取りまとめをした一部をお伝えします。



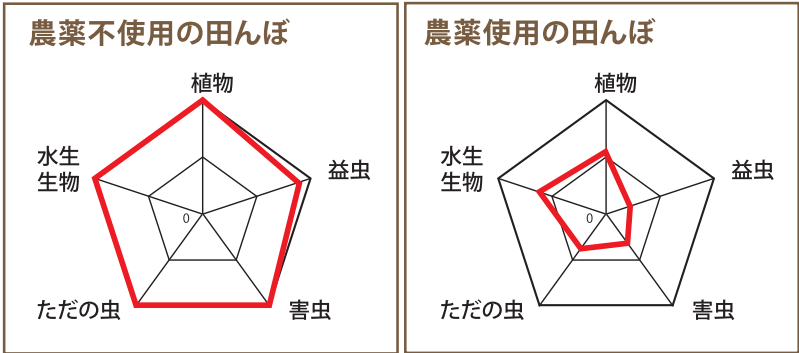
農薬不使用の田んぼと採集された虫(2013年7月21日)「七豊米の田んぼ」



農薬を使っている田んぼと採集された虫(2013年7月21日)「WSa63の田んぼ」

採集されたおもな昆虫類

〈農薬不使用の田んぼ〉	〈農薬を使っている田んぼ〉
アオモンイトトンボ	コバネイナゴ
ササキリ	アブラムシ類
ショウリョウバッタ	トバヨコバイ
ハネナガイナゴ	ヒメトビウンカ
セジロウンカ	セジロウンカ
クロスジヒメテントウ	イネミズゾウムシ
イネミズゾウムシ	コウラコマユバチ亜科の一種
ヒメバチ科のなかま	ユスリカ科のなかま
ユスリカ科のなかま	ヒゲナガヤチバエ
ヒゲナガヤチバエ	イネヒメハモグリバエ



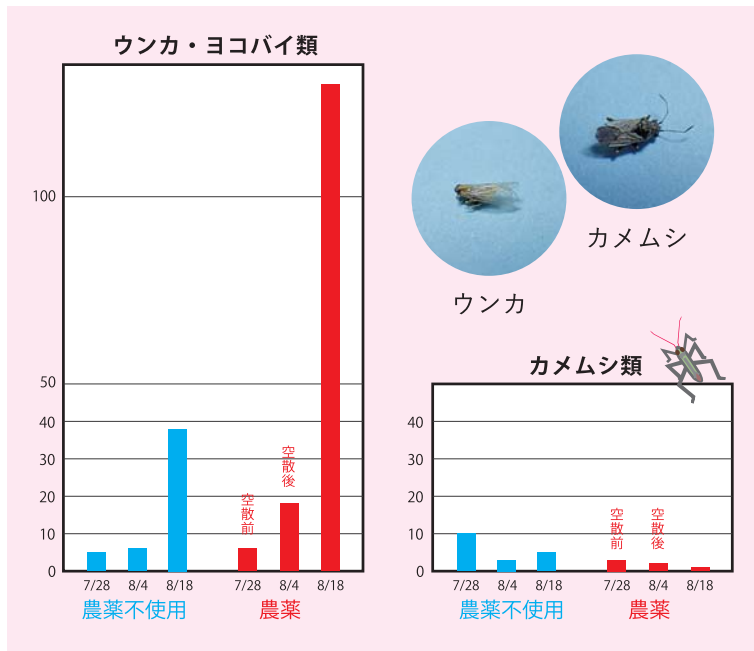
浸透性殺虫剤や畦除草剤の影響をみるために、農薬を使っている田んぼでも許可をいただいて調査をおこなっています。

左の写真は、2013年7月に農薬不使用の田んぼと、農薬を使っている田んぼ(「生きもの元気米」を始める前年のWSa63)それぞれで、昆虫採集専用の網を20振りして採集された虫たちと、調査をおこなった田んぼです。

農薬不使用の田んぼではイナゴやイトトンボなどがみられましたが、農薬を使っている田んぼでは、数ミリ以下のハエ類を中心とする小さな昆虫ばかりが網に入りました。この田んぼは調査の翌年から浸透性殺虫剤と畦除草剤の使用をやめ「生きもの元気米」がつくられるようになりましたが、生産2年目の2015年には水草のシャジクモやイチョウウキゴケが確認されるようになり、ハラビロトンボなどのトンボ類も見られるようになりました。

田んぼの生物多様性を比べようと、確認種数をレーダーチャートで示したのが左下図です。陸上の昆虫は、害虫、益虫、そのどちらでもないただの虫に分け、植物と、水の中の動物の5つのカテゴリーに分けています。確認種数が多いほど、赤色の五角形が大きくなります。水生動物はあまり差はありませんでしたが、植物は、農薬不使用の田んぼでは46種類、農薬を使っている田んぼでは25種類と少なく、畦除草剤の影響があると思われます。農薬不使用の田んぼは全体的に生物多様性が高いという結果でした。





2019年には、7月28日、8月4日、8月18日に、市民参加型で陸生昆虫類の調査をおこないました。浸透性殺虫剤の一斉空中散布が7月29日にあり、その影響をみるために、散布された田んぼと、散布していない田んぼで同じ調査をおこないました。(1枚の田んぼで1人3振り×5人)

浸透性殺虫剤の空中散布から約20日後の8月18日に、農薬を使っている田んぼで害虫のウンカ・ヨコバイ類が爆発的に増えているのが確認されました。こうした状況はこれまでも確認されていることから、これらを食べる天敵動物が田んぼに少ないことで、ウンカ・ヨコバイ類が増えすぎるのではないかと考えられます。



2019年8月18日の定量調査で採集された昆虫の標本
黄色の枠で囲っているところがウンカ・ヨコバイ類。
(左：農薬不使用の田んぼ、右：農薬を使っている田んぼ)

浸透性殺虫剤の使用目的となっている害虫のカメムシ類は、ほとんど網に入りませんでした。これまで、年によって目立つこともありましたが、「斑点米」が増えて問題になるほどカメムシ類が発生したことはありません。河北潟のあたりは、風が強いこと、平場で田んぼの周りに草木が少ないことからカメムシが少ないようです。

ラジコンヘリやドローンによる浸透性殺虫剤の散布目的



食べても害はない。

斑点米：米の等級を決める農産物検査では着色粒に分類。

稲の穂が出る7月下旬～8月上旬に、昆虫のカメムシ退治を目的に一斉防除としておこなわれます。カメムシが細い針のような口で、粳の養分を吸うと、その跡が後に黒くなります。その変色した米粒のことを斑点米といいますが、斑点米が1000粒に2粒まざるだけで、お米の等級が下がることを国が定めています。買取価格も下がることから、カメムシ防除がすすめられています。

(散布しない農家・農地もあります。)

市民参加型調査に参加しよう

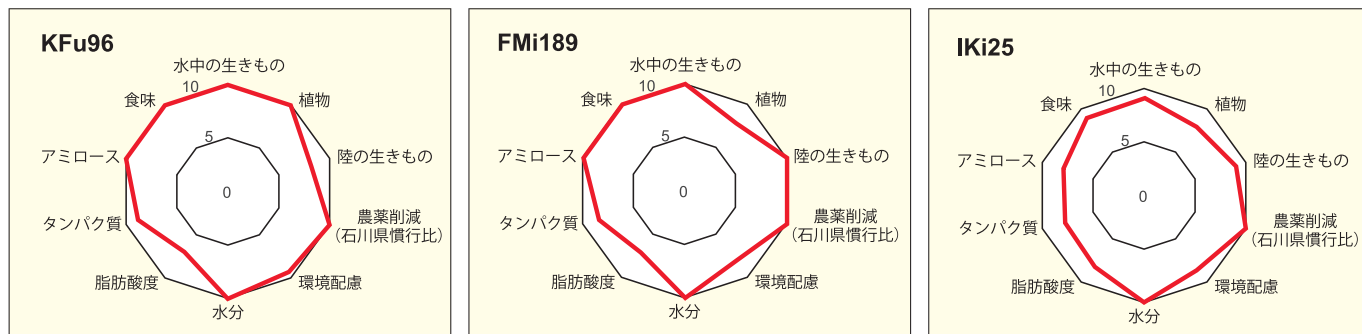
生きものを観察していると、色々なことに気づかされます。お米を作る人、お米を食べる人、多くの人が田んぼの環境や生きものに関心をもつことで、新たな活動が生まれたり、自然再生につながるかもしれません。ぜひ、田んぼごとに調べる生きもの調査に参加ください。

メルマガに登録ください。
活動案内を発信しています →



お米の味と、田んぼの生きものの関係

2022年産の「生きもの元気米」を田んぼごとに食味検査をおこない、2023年に8枚の田んぼで実施した参加型生きもの調査の結果をあわせて、田んぼの生物多様性と、お米の成分や味との関係をみました。下図は農薬不使用で栽培された3枚の田んぼの結果です。農薬を使わない田んぼ、稲架干し・有機肥料の田んぼ、生きものが多く確認された田んぼで食味がとても良く、生きものを守ることと、お米の味を良くすることは比例する結果でした。生きものが元気な田んぼで美味しい米が穫れることを目指していきます。(レーダーチャートは10点満点で点数化し、点数が高いほど良い状態を表しています。)



「生きもの元気米」の活動を応援ください

色々なかたちで皆様に応援いただいています。ぜひ、よろしくお願いします。

- 「生きもの元気米」を食べて応援する
- 「生きもの元気米」の作り手になる
- 「生きもの元気米」農薬不使用栽培の草取りに参加して応援する
- 活動が継続できるよう支援する(寄付)

◎銀行振込 楽天銀行 第一営業支店 普通 093010
口座名義: トクヒ)カホクガタコショウケンキュウジョ

◎郵便振替 ゆうちょ銀行(振替口座) 00730-1-48345
加入者名 特定非営利活動法人河北潟湖沼研究所

*通信欄に寄付金とご記入ください。ご住所とお名前を必ずご記入ください。



クレジット決済

これまでに「生きもの元気米」の取り組みを支援いただいた団体のみなさま

- ・一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト
- ・地球環境基金
- ・国際環境NGOグリーンピース・ジャパン
- ・日本自然保護協会
- ・LUSH

これまでに2つの大賞を授賞しました

生物多様性アクション大賞
えらぼう部門優秀賞



消費者まで情報が届く徹底した仕組みを評価いただきました。

日本自然保護大賞
保護実践部門



日本中に広がることを願うとの講評をいただきました。

制作 NPO法人河北潟湖沼研究所

2023年9月 発行

〒929-0342 石川県河北郡津幡町字北中条ナ9-9 Tel 076-288-5803 Fax 076-255-6941
E-Mail info@kahokugata.sakura.ne.jp URL http://kahokugata.sakura.ne.jp

このパンフレットは、LUSH Re:Fund Local 助成を受けて作成しました。